



# 発展的知能教育のすすめ

知能工作研究所 所長 和田 秀巳

## ＝ 鎮 魂 (みたましずめ) ＝

知能工作研究所の“<sup>ユーキャン</sup>ドゥイット 遊び”のためにと、毎年快く幼稚園を提供して下さっていた江戸川区の松本幼稚園の園長 大野 敏子先生が、11月26日の自宅火災事故のためお亡くなりになりました。ご家族の制止を振り切って、逃げ遅れた94歳のご母堂を救おうと再び火の中に入っていかれたのです。ご母堂は無事助け出されたのですが、先生だけが…。

事故の一週間ほど前、大野園長先生、副園長、私の三人で机を囲み、来年予定の研究会や新しい教材の検討をお願いしていた時、

「幼稚園の指導要領にも書かれているし、間違っていないわ。“<sup>ユーキャン</sup>”の時代が来るわよ。頑張りましょう。この集中思考の課題だけど、奏でるの意味だったら、笛よりも他の楽器の方が良いんじゃない？」

これが最後となりました。

常に園児を温かく見守っている姿、卒園の記念写真でも中央ではなく、そっと脇に凜として正座をしている姿を私は忘れません。口先だけの愛や教育を語る人の多い昨今、我が身を呈して母を助けようとしたその尊い行動は、今後も語り継がれていくでしょう。

知能工作の教育活動が、今日のように園児に喜ばれる様な教材に育ってきたのも、先生の陰になり日向になりのご支援があったからです。

残念です、悔しいです。しかし、この悲しみを乗り越えて、先生と共に教育の道を歩んできたことを誇りにしながら、より高いステップの知能教育をめざし一步一步、歩いていくことをお誓い致します。

知能教育で育った若者たちも、また知能教育に情熱を注ぐ指導者も増えてきています。どうか、どうか心安らかにお眠りください。ご冥福を心からお祈りします。

合 掌

## ＝ 温故知新 ＝

1960年代、社団法人英才教育研究所が、「頭の良い子を育てる」を目的に設立した教育運動の根底には、資源の少ない日本が世界で生きていくには「人の力」マンパワーしかない、その日本人の能力を育てるには、知能が著しく発達する幼児期の教育が最も大切であるという、伏見 猛弥先生（当時玉川大学教育学科教授）の国家観・教育哲学がありました。研究所では、最初は心理学者ターマンの知能7因子（知能は7つの因子）、その後アメリカのギルフォード博士の知能構造（SoIモデル）を基にして英才児のためのカリキュラム・教材が研究されました。毎週行われた研究会では、90因子（後に120因子）を順に一因子ずつ、発達心理学・民族学・生物・数学・国語・世界のゲーム等様々な角度から研究が加えられました。因子の検討が終わると、担当する年齢段階を決め、英才児が90分使用する教材を手作りで製作し発表。因子に適合しているか、能力相応の内容か、ボリューム・面白さ・ユニークさ、といった厳しい討議を経て授業に実施。実施後は報告書に記録提出するというサイクルで教材開発が積み重ねられました。全ての知能因子を一巡するには、実に約3年の年月が必要でした。これが知能教育の始まりです。この真剣な研究と教育実践を両立させた新しい教育運動は、日本の教育を憂う私塾や幼稚園・保育園の教育関係者の賛同を得て拡がりました。しかし、この画期的だった教育運動も、半世紀を経た現在、初期の輝きを失いつつあります。改訂が全くされてない事。そして、最近明らかになった、親子の接する時間の長短が学力に影響するという科学的根拠が、教育の中に生かされていない事です。知能教育は常に、発展的な温故知新の教育運動であって欲しい。考える力を育てる教育なのですから。